

## 「ブルーストと音楽」参考資料

(2022年3月21日、東京・恵比寿、日仏会館ホール)

### レーナルド・アーン Reynaldo Hahn (1875-1947)

ブルーストは1894年5月、マドレーヌ・ルメール夫人邸で、4歳年下のアーンと知り合い、2年にわたる恋愛関係がはじまる（のちに友情となり生涯つづく）。翌年8-9月には、ふたりでノルマンディー地方とブルターニュ地方を旅行。アーンは、自作歌曲をブルーストに歌って聞かせたが、ブルーストの愛したワーグナーやドビュッシーは好まなかった。

### 「リラの木のナイチンゲール」（ドーファン） « Le rossignol des lilas » (Dauphin)

20篇の歌曲を収める『レーナルド・アーンの歌曲』第2集（1922）所収。

Ô premier rossignol qui viens	私の窓辺、リラの木立に
Dans les lilas, sous ma fenêtre,	やって来た今年最初のナイチンゲールよ、
Ta voix m'est douce à reconnaître !	それとわかるきみの声はなんとも快い！
Nul accent n'est semblable au tien !	どんな調べとも似つなぬきみの調べ！
Fidèle aux amoureux liens,	愛の絆に忠実に、
Trille encor, divin petit être !	またも響くトリル、至高の小さきもの！
Ô premier rossignol qui viens	私の窓辺、リラの木立に
Dans les lilas, sous ma fenêtre !	やって来た今年最初のナイチンゲールよ！
Nocturne ou matinal, combien	夜であれ朝であれ、きみの愛の賛歌は
Ton hymne à l'amour me pénètre !	なんと私の心に浸みいることだろう！
Tant d'ardeur fait en moi renaître	あまりの情熱にわが心にはよみがえる、
L'écho de mes avrils anciens,	いにしえの四月のこだまが。
Ô premier rossignol qui viens !	やって来た今年最初のナイチンゲールよ！

### 「わが詩句に翼ありせば」（ユゴー） « Si mes vers avaient des ailes ! » (Hugo)

20篇を収める『レーナルド・アーンの歌曲』（1896）所収。1888年、アーン13歳の作。

ユゴー『静観詩集』所収の詩は、1841年に執筆、愛人ジュリエット・ドルーエに宛てたものとされる。

Mes vers fuiraient, doux et frêles,	わが詩句はつと飛び去るだろう、やさしく軽やかに、
Vers votre jardin si beau,	あなたのいと美しき庭のほうへ、
Si mes vers avaient des ailes,	わが詩句に翼ありせば、
Des ailes comme l'oiseau.	小鳥のごとき翼ありせば。

Ils voleraient, étincelles,  
Vers votre foyer qui rit,  
Si mes vers avaient des ailes,  
Des ailes comme l'esprit.

きらめきとなりて飛びゆくだろう、  
あなたの喜びな住まいのほうへ、  
わが詩句に翼ありせば、  
精霊の翼ありせば。

Près de vous, purs et fidèles,  
Ils accourraient nuit et jour,  
Si mes vers avaient des ailes,  
Des ailes comme l'amour.

あなたのそばへ、汚れなく忠実に  
駆けつけるだろう、夜も昼も、  
わが詩句に翼ありせば、  
愛の神の翼ありせば。

「恍惚の時」(ヴェルレーヌ) « L'heure exquise » (Verlaine)

ヴェルレーヌの詩に作曲した7篇を収める『灰色の歌』(1893)所収。

La lune blanche  
Luit dans les bois ;  
De chaque branche  
Part une voix  
Sous la ramée...

白い月  
森にてり  
木のまから  
こずえのしたに  
ひとつの音が……

O bien-aimée.

おお 愛するひとよ

L'étang reflète,  
Profond miroir,  
La silhouette  
Du saule noir  
Où le vent pleure...

ふかい鏡  
池のてりかえす  
くろいやなぎの  
シルエット  
すすりなく風……

Rêvons, c'est l'heure,

ゆめみよう いまは時

Un vaste et tendre  
Apaisement  
Semble descendre  
Du firmament  
Que l'astre irise...

月光に にじいろの  
み空から  
ふりくるか  
広大な  
やさしい いこい……

C'est l'heure exquise.

いまは時 たえなる時刻

(橋本一明訳『ヴェルレーヌ詩集』角川書店所収)

## ガブリエル・フォーレ Gabriel Fauré (1845-1924)

フォーレの歌曲は、世紀末から 20 世紀初頭の社交サロンで人気を博し、プルーストもこれを愛した。

### 「秋の歌」(ボードレール) «Chant d'automne» (Baudelaire)

1871 年ごろの作曲。フォーレは、作曲にあたり、『悪の華』の原詩に存在した I と II の区分を廃止、第 2 詩節および最後の 2 詩節を削除、全体を以下の 4 詩節に縮めた。

プルーストは、『悪の華』の多数の詩篇を、評論「ボードレールについて」(1921)の中のみならず、『失われた時を求めて』の随所に引用した。作中のバルベック海岸の太陽を描写する際には、本詩の「海のうえに輝く太陽」を援用した(④91, 159。以下、岩波文庫版の巻数と頁数を併記)。

Bientôt nous plongerons dans les froides ténèbres;	やがて私たちは沈むだろう、つめたい暗闇のなかに。
Adieu, vive clarté de nos étés trop courts !	さようなら、あまりにも短い私たちの夏の強い陽射しよ！
J'entends déjà tomber avec des chocs funèbres	もうきこえてくる、私には、不吉なショックを伝えて、方々の中
Le bois retentissant sur le pavé des cours.	敷き石に落とされて行く薪材の響き。 「庭の、

J'écoute en frémissant chaque bûche qui tombe;	ふるえながら私は聞く、一束ごとに投げ落とされる薪の音を。
L'échafaud qu'on bâtit n'a pas d'écho plus sourd.	火刑台が築かれるとしても、こんなに鈍い反響ではあるまい。
Mon esprit est pareil à la tour qui succombe	私の精神は似ている、城門を突き破る重い鉄鎧を
Sous les coups du bélier infatigable et lourd.	執拗に食らって、崩れ落ちる櫓の塔に。

Il me semble, bercé par ce choc monotone,	私は身を揺さぶられる、この単調なショックに。
Qu'on cloue en grande hâte un cercueil quelque part.	どこかでいそいで柩に釘を打っているように思われる、私には
Pour qui ? – C'était hier l'été; voici l'automne !	誰を見送るために？ ——きのうは夏だった、もう秋！
Ce bruit mystérieux sonne comme un départ.	この神秘的な物音は、どこかへの門出を告げているようだ。

J'aime de vos longs yeux la lumière verdâtre,	私は愛する、あなたの長い眼の、みどりをおびた光を、
Douce beauté, mais tout aujourd'hui m'est amer,	やさしい、美しいひとよ、だがいまはすべてが私に味気ない。
Et rien, ni votre amour, ni le boudoir, ni l'âtre,	何物も、あなたの愛も、閨房も、暖炉も、
Ne me vaut le soleil rayonnant sur la mer.	海の面に輝く太陽にまさるとは思われない。

(井上究一郎訳「秋のうた」『訳詩集 シテールへの旅』小沢書店所収)

### 「消え去らぬ香り」(ルコント・ド・リール) «Le parfum impérissable» (Lecote de Lisle)

1897 年の作曲。このころプルーストは、フォーレに手紙を送って「あなたの音楽に惚れこんでいる」、「先だつての夜は、はじめて『消え去らぬ香り』を聴き、身も心もとろける想いをした」と書いた。

Quand la fleur du soleil, la rose de Lahor,	太陽の花、ラオールの薔薇が
De son âme odorante a rempli goutte à goutte	そのかぐわしい魂を一滴ずつ
La fiole d'argile ou de cristal ou d'or,	粘土、水晶、あるいは黄金の小瓶に充たしたとき、
Sur le sable qui brûle on peut l'épandre toute.	燃える砂地にそれをすべてこぼすことも出来る。

Les fleuves et la mer inonderaient en vain  
Ce sanctuaire étroit qui la tint enfermée :  
Il garde en se brisant son arôme divin,  
Et sa poussière heureuse en reste parfumée.

河も、海もこの魂を秘めている狭い聖域を  
いっばいに浸水しようとしても、それは不可能であろう。  
聖域は自ら崩れながらも、その神聖な薫りを守り続け、  
幸せなその粒は薫りにくゆっている。

Puisque par la blessure ouverte de mon cœur  
Tu t'écoules de même, ô céleste liqueur,  
Inexprimable amour, qui m'enflammais pour elle !

なぜなら私の心の開いた傷から、  
おまえもまた流れ出る、おお、天上の酒よ、  
かの人のために私を燃やした得も言えぬ愛よ！

Qu'il lui soit pardonné, que mon mal soit béni !  
Par delà l'heure humaine et le temps infini  
Mon cœur est embaumé d'une odeur immortelle !

私の苦しみが祝福されることを許されよ！  
人の世の時と無限の時を超えて  
私の心は不滅の薫りにくゆる！

(金原礼子訳「不滅の薫り」『ガブリエル・フォーレと詩人たち』藤原書店所収)

### 「秘密」(シルヴェストル) «Le secret» (Silvestre)

1880-1881年の作曲。アルマン・シルヴェストル(1837-1901)の詩「神秘」«Mystère»を一部変更。

プルーストは第六篇『消え去ったアルベルチーナ』のなかでこの歌曲に言及している：「フォーレの歌曲の名である『秘密』」(⑩278)。

Je veux que le matin l'ignore  
Le nom que j'ai dit à la nuit,  
Et qu'au vent de l'aube, sans bruit,  
Comme une larme il s'évapore.

私は願う、夜に告げたその名を  
朝が知らないように。  
夜明けの風に、音もなく  
涙のように消えてほしい。

Je veux que le jour le proclame  
L'amour qu'au matin j'ai caché,  
Et, sur mon cœur ouvert penché,  
Comme un grain d'encens il l'enflamme.

私は願う、朝に私が秘めた恋を  
昼が言いひろめてくれるように。  
開いた私の胸の内に傾いて、  
香の粒のように燃やしてほしい。

Je veux que le couchant l'oublie  
Le secret que j'ai dit au jour  
Et l'emporte, avec mon amour,  
Aux plis de sa robe pâlie !

私は願う、昼に告げた秘密を  
落日が忘れてくれるように。  
そして、落日が蒼ざめた衣のひだに包んで  
私の恋と共に持ち去って行ってほしい。

(金原礼子訳「秘めごと」『ガブリエル・フォーレと詩人たち』藤原書店所収)

### エドゥアルド・ディ・カプア Eduardo Di Capua (1865-1917)

「オー・ソレ・ミオ」(カプッロ) «O sole mio» (Capurro)

「なんてすばらしいのだろう、太陽の輝く日は。でも、もっとすばらしいのは、きみの顔に輝く私の太陽だ」と歌う、有名なカンツォーネ。制作は1898年。

プールの第六篇『消え去ったアルベルチーナ』に描かれたヴェネツィア滞りで、ゴンドラ曳きがこの歌をうたう。作中の時代設定は1900年代後半（プールの自身のヴェネツィア滞りは1900年）。

母親といっしょにヴェネツィアに滞在していた主人公「私」は、帰途につくはずの日、ホテルの宿泊予定リストのなかに「ピュトビュス男爵夫人御一行」と記されているのを見つけ、夫人の召使いへの欲望に駆られ、「ぼくは出発しない」と駄々をこねる。先に母親だけを駅へ出発させた「私」は、ひとり大運河に面したホテルのテラスにとどまり、「太陽が沈む」のを眺める。そのとき目の前で、ゴンドラ曳きが「ソレ・ミオ」をうたう。その「歌声は、私の悲嘆を証言しているようだった。今でもこれから母のところへ駆けつけていっしょに汽車に乗りたいのなら、こんな歌を聴くのをもちろんやめなければならず、一刻も無駄にせず出発する決心をしなければならぬが、それが私にはできなかった。私はじっと動かず、立ちあがることはおろか、立ちあがる決心をすることさえできないでいた。私の想いは、なんらかの決心をするのをきつと避けていたのだろう、つぎつぎと繰り返される「ソレ・ミオ」のフレーズをひたすら一心に追い、歌い手に合わせて自分も心のなかで歌い、フレーズが朗々と高まるのを見越してそれに合わせ、またそのフレーズとともに声を落とすのだった」（⑩534）。

#### クロード・ドビュッシー Claude Debussy (1862-1918)

『ペレアスとメリザンド』3幕3場から *Pelléas et Mélisande, acte III, scène 3 (extrait)*

メーテルリンクの同名戯曲に基づきドビュッシーが1901年に完成した5幕のオペラ（1902年初演）。アルケル王にはゴローとペレアスの兄弟がいる。ゴローは、妻にしたメリザンドがある日ペレアスと睦みあうのを目撃して、嫉妬に駆られる。3幕2場、ゴローに連れられ、城の地下、「死臭ただよう」よどんだ水のあたりをさまよったペレアスは、3幕3場で、地上に出てくる。そのときのペレアスのせりふ：

« Ah ! Je respire enfin ! / J'ai cru, un instant, que j'allais me trouver mal dans ces énormes grottes ; j'ai été sur le point de tomber. Il y a là un air humide et lourd comme une rosée de plomb, et des ténèbres épaisses comme une pâte empoisonnée. / Et maintenant, tout l'air de toute la mer ! / Il y a un vent frais, voyez, frais comme une feuille qui vient de s'ouvrir, sur les petites lames vertes. / Tiens ! / On vient d'arroser les fleurs au bord de la terrasse et l'odeur de la verdure et des roses mouillées monte jusqu'ici. / Il doit être près de midi ; elles sont déjà dans l'ombre de la tour. / [...] Il est midi, j'entends sonner les cloches et les enfants descendent vers la plage pour se baigner. »

「ああ、やっと息がつける！／いっとき、あの巨大な洞窟のなかで気を失うかと思った、もうすこしで倒れるところだった。あそこの空気は湿っぽく、鉛の霧のように重い。そして深い闇はまるで毒入りの練り粉のようだ。／でも今や、空気には大海原の気配！／風もさわやか、ほら、開いたばかりの若葉のごとくさわやかに、緑なす波のうえを渡ってゆく。／おや！／テラスの端の花に水をやったとこなのか、緑葉の香りと濡れたバラの香りがここまでのぼってくる。／[...] 正午だ、鐘の音が聞こえ、子供たちが水浴びに浜辺へ降りてゆく。」

プールの1911年2月21日、テアトロフォン（電話線による実況中継）で『ペレアスとメリザンド』全曲（オペラ＝コミック座）を聴いて感激。同月末頃には、『ペレアスとメリザンド』のせりふの文体模写もつくった。上記の場面については、「海の冷たさと、そよ風に運ばれてくるバラの香りが浸みこんでいる」と書いた（同年3月4日のレーナルド・アーン宛て書簡）。

『ペレアスとメリザンド』のこの場面は、プルーストの第四篇『ソドムとゴモラ』で話題になる。

主人公の「私」は、現代音楽に惚れこんでいるカンブルメール若夫人にこう言う。「まるで『ペレアス』ですね、テラスまであがってくるバラの香りというのは。その強烈な香りが曲に漂っているせいかな、枯草熱とバラ熱にかかりやすい私など、この場面を聴くたびにくしゃみが出たものです。」この指摘に、若夫人は「なんという傑作でしょう、『ペレアス』は！」と大声をあげる (⑧476)。

さらにべつの機会に「アンジェラスの時を告げる小さな鐘」の音が聞こえてきたとき、「私」が「これもまた、相当『ペレアス』ですね、どの場面がおわかりでしょう」と言うと、カンブルメール若夫人は「もちろんわかってますわ」と答える。ところが語り手は「夫人の声にも顔にもなんらかの思い出につながる表情は造型されず、その笑みも根拠のないつくりものである」と指摘する。プルーストは、『ペレアス』を「傑作」だと絶賛した夫人がかならずしも作品に通じているわけではないことを示唆したのである。

### ジュール・マスネ Jules Massenet (1842-1912)

『マノン』 5幕5場からマノンとデ・グリュウの二重唱

アベ・プレヴォーの小説『マノン・レスコー』に想を得て、アンリ・メイヤックとフィリップ・ジルが台本を書き、ジュール・マスネが作曲した人気のオペラ・コミック (1884年初演)。

青年貴族デ・グリュウと美貌の娘マノンは恋に落ちて同棲するが、ある日マノンはべつの貴族と駆け落ちし、傷心のデ・グリュウは聖職につく。

3幕2景7場で再会したとき、ふられた恨みを忘れないデ・グリュウに、マノンはこう言う：「ああ口惜しい！ わが身を奴隷と思うて逃れる小鳥も、たいてい夜には必死に舞いもどってガラス窓を叩くもの」。このせりふは、『失われた時を求めて』の第6篇『消え去ったアルベルチーナ』に引用される。「私」は、同棲していた恋人の失踪を悲しんでいたとき、「ふと上の階に住む女性の弾く『マノン』の調べ」を耳にし、「よく知っているその歌詞をアルベルチーナと私とに当てはめ、深く心を揺さぶられて泣きだした」という (⑫87)。

小説のこの一節では、『マノン』の幕切れ、5幕5場の二重唱も引用される：

Des Grieux : « Manon, réponds-moi donc ! »

Manon : « Seul amour de mon âme ! / Je ne sais qu'aujourd'hui la bonté de ton cœur [...] »

デ・グリュウ：「マノン、さあ答えておくれ！」

マノン：「わたしの心がただひとり愛した人！／きょうはじめて知ったの、あなたのやさしい心を[...]

この引用につづく小説の本文：「マノンはデ・グリュウのもとへ帰ってきたのだから、アルベルチーナにとっては私が生涯でただひとり愛した人とみなされるような気がした。しかし残念ながらアルベルチーナは、かりにいまこの同じ歌を耳にしたとしても、デ・グリュウの名を聞いて愛おしく思うのはこの私ではないだろう [...]。私としては、アルベルチーナが私を「わたしの心がただひとり愛した人」と呼んで「わが身を奴隷と思った」のは間違いだったと認めてくれるなどと考える、甘い気分身をゆだねる気にはなれなかった」 (⑫88)。

## レーナルド・アーン Reynaldo Hahn

「画家の肖像」(プルースト) « Portraits de peintres » (Proust)

「画家の肖像」は、青年プルーストがルーヴル美術館で鑑賞した4人の画家の画に想をえて制作した4詩篇。カイク(1620-1691)とポッター(1625-1654)は、ともにオランダの風景画家。ヴァトーは「雅な宴」を描いたフランスの画家(1684-1721)。ファン・ダイク(1599-1641)は、フランドル出身で、イギリスの宮廷で活躍した肖像画家。以下に、プルーストの4詩篇の邦訳を掲げる。

レーナルド・アーンは、この4詩篇に基づくピアノ曲を制作した。曲は、1895年5月28日、マドレーヌ・ルメール(『失われた時を求めて』のヴェルデュラン夫人のモデル)邸にて、エドゥアール・リスレー(1873-1929)によって初演された。

### アルベルト・カイク

カイク、灰色の<sup>もりぼと</sup>森鳩が群れ飛び、  
水面のようにかき乱す、清涼な大気に溶け込む夕陽、  
黄金の<sup>きん</sup>湿り、牡牛の額や白樺の<sup>はむら</sup>葉叢に映える後光、  
丘の辺に煙立つ晴れた日々の青い香り、  
あるいは虚ろな空に<sup>あ</sup>ぬる明光の沼。  
帽子に薔薇色の羽根飾り、手のひらを脇腹に当てて、  
騎士たちの準備は整っている。清らかな大気が肌を薔薇色に染め、木々も集落の家々も影を広げず、  
柔らかな金髪の巻毛をかすかにふくらませる。  
そして燃える野とさわやかな流れに心ひかれ、  
深いこの時刻を呼吸しに騎士たちは出発する、  
淡い金色の、憩いに満ちた<sup>もや</sup>霧の中で夢みる牡牛の群れを  
その早駆けで乱すこともなく。

### アントワーヌ・ワトー

さだかならぬ仮面のかげ、青いマントで  
木々と人々の顔を隈取る<sup>たそがれ</sup>黄昏。  
ものうく疲れた口には<sup>くちづけ</sup>接吻の名残……  
ぼんやりしたものが優しくなり、身近なものが遠くなる。  
もう一つ、遠く憂愁に満ちた仮装した人々の  
悲しく魅惑的な、よりいっそう偽りの愛の<sup>しぐさ</sup>仕種。  
詩人の気まぐれ——それとも愛人の慎重さ、  
というのも愛は巧みに飾られる必要があるからだ——  
ともあれここに、舟と<sup>うたげ</sup>宴、<sup>しじま</sup>沈黙と音楽。

### パウルス・ポッター

一様に灰色な空の暗い悲しみ、  
たまさかの晴れ間に青さを見せるだけになおのこ  
そのとき、寒さに<sup>こご</sup>凍える平野に、「と悲しく、  
理解されぬ太陽の<sup>なまぬる</sup>生温い涙をしみ込ませる。  
ポッターよ、喜びも彩りもなく果てしなく広がる  
暗い平野の憂愁に閉ざされた気質よ。  
痩せこけた小さな庭も花をつけてはいない。  
<sup>ておけ</sup>手桶を引いて農夫が帰ってくる。ひよわな牝馬  
諦めて、不安げに、夢みながら、 「は、  
物思わしげな頭を落ち着きなく振り上げ、  
息も切れ切れに、風の強い息吹を嗅ぐ。

### アントーン・ファン・ダイク

月とピロードと森に輝く  
人の心の優しい誇り、ものたちの高貴な<sup>みやび</sup>雅、  
気高く美しい言葉遣いを思わせる姿勢と姿態、  
——ご婦人がたと王たちの、父祖伝来の誇り高さ！——  
落ち着いた仕種のプリンス、ファン・ダイクよ、  
ほどなく世を去るはずの美しい人物たち、 「る。  
まだ開く美しい手を描くのに、君はとりわけ秀でてい  
そうとは思ってもせずに——それでもいいではないか——  
その手が君に<sup>しゅうろ</sup>棕櫚の枝を差し出す！  
松の下、波のそばで憩う騎士たち、  
波のように——<sup>おえつ</sup>嗚咽に近い波のように——静かな彼ら、  
早くも華麗さと厳肅さを見せている王子たち、  
諦めきった衣裳、羽根にきりと飾られた帽子、  
そして宝石の中では——炎越しに見える水の流れか——  
目に浮かべるにはあまりにも誇り高い魂を満たす

苦い涙が、とめどなく流れている。

そして君は皆より一段高いところを、気取って散歩する、  
淡青のシャツを着込み、手を腰に当てて。

残る手には、葉をつけたまま枝からもぎ取った果実。

わけもなく僕は夢みる、君の身振りと目を。

あの暗い隠れ処に立ったままの、しかし元気そうな

リッチモンド公爵、おお若き賢者よ！——あるいは魅力的

な狂人？——

僕はいつも君に立ち返る——首にかけたサファイアは

静かな君のまなざしにも似て、柔らかな輝きを帯びている。

(岩崎力訳「画家の肖像」『楽しみと日々』岩波文庫所収)

### エマニュエル・シャブリエ Emmanuel Chabrier (1841-1894)

「牧歌」(『十の絵画的小曲集』より) «Idylle» (extrait de *Dix pièces pittoresques*)

狂詩曲『スペイン』の作曲家シャブリエが1881年に発表したピアノ曲集の一曲。

プルーストは、1907年7月1日、リッツ・ホテルにて晩餐会とコンサートを主宰し、そのプログラムのなかにこの曲を選んでいた。また1912年11月11日、シャブリエのオペラ『グヴェンドリーヌ』(1886年ブリュッセル初演、1893年パリ初演)がパリのオペラ座で再演されたとき、プルーストは前日、友人のストロース夫人に、テアトロフォンでこれを聴くよう勧めた。

### リヒャルト・ワーグナー / フランツ・リスト Richard Wagner (1813-1883) / Franz Liszt (1811-1886)

「イゾルデの愛の死」«Isoldes Liebestod»

ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』の終幕、イゾルデの「愛の死」のアリアに基づき、リストが1867年に完成したピアノ曲。

プルーストは1902年6月7日、シャトー・ドー劇場で『トリスタンとイゾルデ』の全曲を聴いている。また、1907年7月1日、リッツ・ホテルにて晩餐会とコンサートを主宰したとき、プログラムのなかにこのリストの編曲を選んだ。

さらに晩年の評論「ボードレールについて」(1921)でこう書いた。「ワーグナーを大いに讃美する私からすると、子供のころ、コンセール・ラムルーで、『トリスタン』や『マイスター・ジンガー』のような真の傑作に捧げて然るべき熱狂が、なんの見境もなく『タンホイザー』のなかの「星へのロマンス」や「エリーザベトの祈り」のようなつまらぬ曲によってかき立てられていたのを想い出してしまう。」この見解は、第五篇『囚われの女』でヴァントウイユの『七重奏曲』の真の独創性が問題になるときにもくり返される(⑩166)。

同じく『囚われの女』で「私」は、ピアノでヴァントウイユの曲を弾いていたとき、思わず「『トリスタン』だ！」とつぶやき、「譜面台に置かれたヴァントウイユのソナタのうえに、ちょうどその日の午後コンセール・ラムルーが抜粋を演奏していた『トリスタン』の楽譜を重ねてみた」(⑩354)。



## ガブリエル・フォーレ Gabriel Fauré

「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 第1番 イ長調」第4楽章

*Sonate pour violon et piano n° 1 en la majeur, quatrième mouvement*

フォーレが30歳の1876年に完成させた作品（1877年初演）。

ブルーストが1907年7月1日、リッツ・ホテルで主宰したコンサートのために選んだ曲のひとつ。当日のヴァイオリン奏者はモーリス・アイヨ。ピアノ演奏を頼んでいたフォーレは病気で、リスレールが代役を務めた。

『失われた時を求めて』では、ノルマンディー地方の高台の別荘ラ・ラスプリエールでヴェルデュラン夫人が催した晩餐会において、シャルリュス男爵が、みずから庇護するヴァイオリン奏者モレルの伴奏をして、「フォーレのピアノとヴァイオリンのためのソナタの終楽節（不安と苦悩にみちたシューマンを想わせる曲だが、それでもフランクのソナタよりも以前の作）」を弾く（⑨238）。

のちにヴェルデュラン夫人から「このあいだフォーレのソナタをみごとに弾きこなしたヴァイオリン奏者がいまして、たしかフランクという名前でしたが、ご存じですか？」と訊ねられたシャルリュス男爵は、へそを曲げ、「ああ、あれは最悪です。ことヴァイオリン奏者にかんしては、私の奏者だけで満足なさるようご忠告します」と答える（⑩180）。

## カミーユ・サン＝サーンス Camille Saint-Saëns (1835-1921)

「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 第1番 二短調」第1楽章

*Sonate pour violon et piano n° 1 en ré mineur, premier mouvement*

サン＝サーンスが1885年に作曲、同年に初演されたソナタ。

この曲は、『失われた時を求めて』の第一篇第二部「スワンの恋」で「ふたりの恋の国歌」として演奏されるヴァントゥイユのソナタの生成に大きな影響を与えた。実際、ヴァントゥイユのソナタは、初期草稿では「サン＝サーンスのソナタ」とされていた。

恋人オデットにふられた心の傷がようやく癒えたスワンが、久しぶりにサン＝トゥーヴェルト夫人邸の夜会に出かけてある曲を聴いたとき、「突然、オデットがはいってきたような気」がする。「これはヴァントゥイユのソナタの小楽節だ、聴かないでおこう！」と思う間もなく、「オデットが自分に惚れていたころの思い出」がありありとよみがえる（⑫347-348）。

この一節の発想源について、ブルーストはこう語った。「サン＝トゥーヴェルト夫人邸の夜会の場面では、私の好きな作曲家ではありませんが、サン＝サーンスの『ピアノとヴァイオリンのためのソナタ』に出てくる、感じはいいけれど凡庸というほかない楽節を念頭に置いていました（何度もくり返しあらわれるその一節がどの箇所か正確に申しあげることができます。ジャック・チボーが演奏して大当たりをとった一節です）」（1919年4月20日のジャック・ド・ラクルテル宛て書簡）。

**セザール・フランク César Franck (1822-1890)**

「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ イ長調」第4楽章

*Sonate pour violon et piano en la majeur, quatrième mouvement*

フランクが1886年に作曲、同年に初演されたソナタ。

ブルーストは1913年4月19日（『スワン家のほうへ』初校出校の直後）、ヴァイオリン奏者ジョルジュ・エネスコ（1881-1955）とピアニストのポール・ゴールドシュミット（1877-1957）の演奏でこの曲を聴いた。

「スワンの恋」におけるサン＝トゥーヴェルト夫人邸での夜会で演奏されたヴァントゥイユのソナタの描写に、つぎの一節がある。「最後のパートの冒頭で聴いたピアノとヴァイオリンの対話の、なんと美しかったことか！ 人間の言葉は排除されているが、奇抜なものが幅を利かせるどころか、すっかり影を潜めていた。人間の話す言葉がこれほど厳正な必然となりえたことはなく、これほどまでの的確な問いと明白な答えの域に達したことはなかった。まず孤独なピアノが、伴侶に見捨てられた小鳥のように不満を訴える。それをヴァイオリンが聞きつけ、隣の木からさえずるように答える」（②361）。

この一節の発想源について、ブルーストはこう説明した。「ピアノとヴァイオリンがさえずり合う二羽の小鳥のように悲しげな音を奏するとき、私が念頭に置いていたのはフランクの『ソナタ』で、とりわけエネスコが演奏したものです」（1918年4月20日のジャック・ド・ラクテル宛て書簡）。

（文責：吉川一義）